

## ユネスコ・デザイン都市フォーラム in KOBE

The UNESCO Creative Cities Network

— デザインのチカラで魅力的な都市に、ステキな暮らしを —

2008年10月16日、神戸はユネスコ・創造都市ネットワークのデザイン都市に認定されました。認定から一年、ここ神戸で、世界の全デザイン都市の代表者が初めて一堂に会し、各都市の多様な取り組みや今後の展望を紹介しました。また、パネルディスカッションでは、デザイン都市間の連携交流や、デザインを視点とした、豊かで創造力あふれる魅力的な都市づくりについて語り合いました。



### 開会あいさつ



神戸市長 矢田 立郎

神戸は1995年に阪神淡路大震災に見舞われ、まちは甚大な被害を受けましたが、市民と力を合わせて、「まちなみ」、「くらしの文化」、「ものづくりの技術」といった神戸らしさを失うことなく、創造的な復興への歩みを続けてきました。

現在、これらの神戸らしさを、デザインの視点で見つめなおし、磨きをかけることで、神戸の新たな都市の魅力と活力を創り出し、そして市民の暮らしの豊かさを創造する都市戦略「デザイン都市・神戸」を推進しています。2008年10月16日には、こうした取り組みが評価され、ユネスコ・創造都市ネットワーク「デザイン都市」にアジアで初めて認定されました。

今回のデザイン都市・フォーラムには、デザイン都市に認定されている全ての都市の代表者に参加いただいています。この機会に、各都市の施策、また今後の展望をご紹介いただき、創造都市ネットワークの都市間連携・交流がさらに深まることを願っています。

### 特別講演

「ユネスコからのメッセージ」



Creative Cities Network

ドゥン・リー

ユネスコ(国連教育科学文化機関) 文化部門 文化的表現・創造産業部

ユネスコと神戸の協力関係は、最近始まったものではなく、特にデザインの分野では、フェリシモという会社とデザイン21という協同プログラムを実施してきました。この協力関係を今後も継続、強化していきたいと考えています。

創造都市ネットワークのコンセプトは、創造性や文化が都市計画や都市再生に大きく役立つという考えに基づいています。そして、都市をつないでいくことで、都市が持つ創造的な可能性を、グローバルなプラットフォーム上で、より発揮することができると考えています。ユネスコの創造都市ネットワークは、ネットワークのネットワークであり、実際にそれぞれの都市は、都市の可能性を実証し、継続的にネットワークにコミットして、長期的に参画していくということが求められています。このような可能性があり、また、継続的に関わっていくことによって、官民が協力して、異なる創造コミュニティをつないでいき、地域でのいろいろな活動を可視化し、そして相互に都市を結びつけて、一緒に協力体制をとれるようにすることを主たる目的としています。



## 「デザイン都市の取り組み ―各都市の事例紹介―」

### 「ベルリンのまちづくり事例」



### イェルク・ズアマン

DMYベルリン社 最高経営責任者

ベルリンは、特別な歴史を持っているまちです。ベルリンは 40 年間、東側と西側で別々の文化が育ってきた。統合後は新しい状況に入り、東の人が西に移動し、東側は非常に空き地が多くなったためにデザインができるような状況、機会が生まれ、国内外のデザイナーが移り住むという現象も起こっています。

ベルリンは、いわゆる通常の産業が進んでおらず、再統一が行われてから、創造力のある人たちによって形成されてきました。ベルリンは豊かではありませんが、活動のためのスペースを簡単に確保でき、さらに生活費も安くすむ都市であったため、オープンマインドな人たちが増えてきました。こうした中で創造的な才能が蓄積され、デザイン関連の活動が強化されていきました。これは、会社の立ち上げ、仕事の創出、お互いが協力し合うためのネットワークの構築などを全てのデザイナーたちが自分たちで行ってきたためです。

2001 年に入り、ベルリン政府が創造的なデザイン活用に関して支援を行うようになりました。ネットワークや基盤を形成したり、コンサルティングや指導、マーケットや他のネットワークなどの情報提供、国際的なマーケティングなどの支援を行ったりしています。2006 年以降は、ベルリンはユネスコの創造都市ネットワークやクリエイティブメトロポリスというネットワークに加盟しています。ベルリンに

は、約 22,900 の創造産業の企業があり、従業員数は 16 万人、175 億ユーロの市場規模で、GDP の 21 パーセントを占めています。ドイツ国内でみると、ベルリンの創造産業は非常に強く成長しています。

DMY ベルリンは、2003 年にスタートし、新たなやり方でデザインを紹介する活動を行いたいと考えました。

現在では各国から 25,000 人の訪問があり、18,000 m<sup>2</sup>の展示スペース、参加デザイナーも 550 名、市内に 42 箇所以上のギャラリーがあります。ベルリンでは、デザインという職種で仕事を見つけるのが難しいですが、資質のあるデザイナーはたくさんいます。そこで、彼らの作品を公開できるような機会をつくり、国際的にも、貿易関係の人たちにも紹介できればと考えました。

ベルリンのデザイナーにとって、国際的に彼らの活動が知られ、パートナーや、製造・販売をしていただくところを見つけることが非常に大切です。また、海外から我々のフェスティバルに人々に来ていただいたり、国際的なデザイナーにベルリンに来て働くようしたりするように取り組んでいます。この両方向での取り組みを進めることでネットワークを構築できると考えています。



## 「経済発展に向けた公共部門による創造産業の振興戦略」



マルコス・アマデオ

ブエノスアイレス市経済発展局創造産業・外国貿易統括部 副部長

ブエノスアイレスのデザインの伝統は、1930年から始まっており、これまでイス、ソファー、オブジェ、そして建築などのデザインが進化を遂げてきています。ブエノスアイレスは、過去に非民主主義の時代があり、1983年に民主化されました。同時に、テキスタイル、インダストリアルデザインといった新しいクリエイティブなキャリアが開かれるようになりました。1985年以降、ブエノスアイレスの大学でデザインのコースが多く創られ、そのため、人材が非常に豊かであり、彼らがクリエイティブ産業を支えています。

2001年には、元々は魚市場であった19世紀の建物を改装し、全てのデザイン産業を支える機能を持つメトロポリタンデザインセンターが完成しました。センターの活動はいろいろなエリアにまたがっており、ベルリンやロンドンのデザインフェスティバルへの参加などの国際的な展開も図っています。また、MIDIというシンクタンクがあり、デザインについての傾向や新たな動きを研究しています。Incubaはとても興味深いプロジェクトで、新しいアイデアをインキュベートし、クリエイティブ産業の起業を促そうとしています。



都市におけるデザインを進展させるために、「デザイン月間」において、いろいろな活動を集中して展開しており、デザインセンターでは先頭に立っている様々な産業と国際的なネットワークづくりを図るような取組も行っています。さらに、国際的なデザインフェスティバルを計画しており、いろいろな都市を招聘しようと考えています。ユネスコのデザイン都市に認定されたことを契機に様々な都市が集い、それぞれの活動をお互いに分かち合うことが重要だと考えています。

我々の課題はコミュニケーションではないかと考えています。若い人たちが多くの取り組みに参加し、そしてこれが同時にツールとなり、経済の発展に寄与することができます。全ての人の生活の進展に役立つ、生活の質の改善に将来に繋がるツールだということを伝えたいと考えています。それこそが我々ブエノスアイレスのセンターの役割、挑戦だと考えています。

---

## 「ユネスコ・デザイン都市モントリオールのまちづくり」



### マリー ジョゼ・ラクロワ

#### モントリオール市デザイン・コミッショナー、都市経済計画部デザイン担当局長

モントリオールは世界で二番目に大きいフランス語圏のまちで、住民の半分はバイリンガル、人口の1/3は移民で成り立っています。1990年初めから、デザインが今後の経済の新しい要素として非常に重要だと認識して、市及び、行政区の中にデザイン委員会を設置しました。市民の生活の質や、都市の魅力の決め手となる小売店やレストラン、ブティックのデザインを重要と捉え、デザインコンペを10年間続けてきました。そうすることにより都市のデザインの質を全体で上げようとしたましたが、これは非常にうまくいき、いろいろな都市で展開されています。2005年には、「都市のデザイン、デザインの都市」という新しい行動計画を打ち出しました。デザイン都市となるためには、まち全体のデザインを改善することが必要だと考えたからです。

私たちは、主に3つの取り組みを行っています。まず、デザインワークショップや、コンペ、セミナーといったデザインの手引きとなるような取り組み、2つ目にデザインの良い事例を促進し広げる取り組み、3つ目に、ネットワークの構築です。これは、都市の中のデザインのチャンピオンを選ぶという地

域レベルの取り組みから、ユネスコ 創造都市ネットワークを活用した国際的な取り組みまでしています。

ユネスコのデザイン都市に認定されたとき、市民もデザインの専門家も、なぜデザイン都市に認定されたのか、それはどういうことなのか知りませんでした。それを理解していただくためには、都市の能力を知っていただく必要がありました。そこで、デザイン モントリオール オープンハウスというイベントをし、あらゆるデザインのオフィスを公開しています。

また、政治家、デザイナー、市民、それぞれの距離を短くするために『ぺちやくちゃナイト』というイベントを行っています。通常の『ぺちやくちゃナイト』は、デザイナーが自分のアイデアなどを他のデザイナーに紹介する際に行われました。それを逆取りし、市長や区長たちを呼んで、彼らが直面している事を市民やデザイナーに紹介することを試みました。つまり、区長がデザイナーたちに対して地域でのデザインの課題や可能性をプレゼンテーションすることで対話が進められているのです。このように独特の方法で対話が始まり、このような会を年に1回やろうとしています。



また、いわゆる実験的なかたちでいろいろなデザインの分野の基盤を構築していきたいと考えています。都市における生活の質を上げるとともに、デザインに関わる人たちの裾野を広げていきたいと考えています。さらに、都市計画や住環境の改善、住民に対してはデザインに関するより良い教育を進めていきたいと思っています。

モントリオール市は、ユネスコからデザイン都市と選定されたことについては、今後我々はさらに努力しなさいということであると認識しています。あらゆる当事者、例えば区長、住民、専門家、企業家などに、自分たちの問題だと理解させて、デザイン都市を促進していきたいです。

私たちは、モントリオールのユネスコ デザイン都市としての地位を固め、都市をデザインの研究、刷新、実験の場として、デザインを高めていきたいと考えています。そして最終的には、人々の生活の質や都市の魅力を改善していきたいと考えています。

ユネスコの認定は、レッテルでもなければお墨付きをもらったわけでもなく、今後さらに努力し、ネットワークを広めていくようにということだと捉えています。デザイナーはもちろんのこと、選ばれた政治家や、市民、専門家、企業家の方々に自分たちの問題であると認識いただき、皆で取り組んでいきたいと考えています。

## 「名古屋市の取り組み紹介」

(写真別途)



### 池側 隆之

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 准教授

名古屋の歴史は、1610年の名古屋城の築城とともに始まり、文化的な遺産を大切にしながら今日に至っています。

デザイン都市としての名古屋の歴史を振り返ると、築城を機にトップクラスのエンジニアたちが国内から集まり、ものづくり工業の起源といわれている先進的なデザインの技術を生み出してきた経緯があり、このような伝統的なものづくりの流れが、今日ではデザイン産業に直結して、非常に隆盛を迎えています。

す。

1989年に、第16回世界デザイン会議(ICSID)が開かれ、46カ国、3,764名の参加があったほか、同時期に、世界デザイン博覧会も開催し、その中で名古屋市はデザイン都市宣言を行いました。1992年には、株式会社国際デザインセンターを設立、1995年には世界インテリアデザイン会議(第17回IFI総会)が開催され、1996年には、国際デザインセンターが開館、2003年には世界グラフィックデザイン会議(Icograda)が開催されるという流れがあります。そして、2005年には、トリノ市と姉妹都市提携を結び、デザイン交流事業も非常に活発になってきています。株式会社国際デザインセンターは愛知県、名古屋市、株式会社日本政策投資銀行をはじめとする民間企業の出資による第三セクターとして設立され、商業施設も併設された複合ビル内に位置するため、一般の方々の出入りも非常に多い施設です。

デザインに関する活動としては、地域の若手クリエイターたちの手によるデザインイベント「名古屋デザインウィーク(NDW)」や、国際若手デザイナーワークショップ、2010年に7回目を迎える国際デザインコンペ”NAGOYA DESIGN DO!”の開催などがあげられます。



名古屋市とその周辺には、約50以上のデザインに関する公立、私立の大学、短期大学、専門学校が存在しており、その数は国内二番目になります。さらに、15のデザイン関連団体からなる中部デザイン団体協議会(CCDO)が名古屋での国際デザインフォーラムなどの主催構成団体のひとつとして参加しています。

2008年のユネスコ創造都市ネットワーク加盟後は、ネットワークの枠組みの中で、デザイン都市として活動するにあたり、原石を磨くこと、環境都市への誘い、多様なネットワークをコンセプトとしています。2010年には、現代美術の国際展示「あいちトリエンナーレ」や、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)の開催などが予定されています。

---

## 「深圳:一村落から大都市へ」



王 小明

深圳創造文化センター長

---

深圳市は、鄧小平が主導的な役割を果たして、中国の改革・開放政策を行った際にデザインされた都市です。香港に近接し、1980年に中国で最初の経済特区に選ばれ、中国の経済成功のモデルとしての役割を30年間果たしてきました。

深圳の住民の多くは近隣の地方からの移民であり、都市住民の平均年齢は約 30 歳、教育水準は非常に高いです。

経済的な競争力においては、ハイテク、金融、物流産業、文化産業の 4 分野に注力しています。そして、その中でも文化産業が、深洲の発展に大きな役割を果たしています。2003 年 1 月に、文化ベース都市という戦略を策定し、文化経済を原則として、文化的かつエコロジカルな都市の構築を目指してきました。主要な文化産業を担う企業や産業クラスターが急速に成長していくとともに、中小企業やスタジオなども発展してきました。その結果、2008 年には、深圳における文化産業の付加価値額が 500 億人民元に達し、都市の GDP の 6.88 パーセントを占めています。



深圳のデザイン産業は、比較的高いマーケティングレベルを有しており、また他の産業とも緊密な繋がりを持っています。深圳そのものがデザインハブ、そして中国の主要な都市の一つとなっています。深圳には 6 千以上のデザイン企業があり、雇用従業員数は 10 万人を超えています。若いデザイナーにとっても、もっとも魅力的な都市で、中国の優れたデザイナーの多くが、深圳から国内のデザイン産業へと影響力を大きく及ぼしています。また、政府の産業政策の支援を受け、古い工場をリノベーションして、デザイナーやアーティスト、工芸家、デザイン専攻の卒業生、またその他の創造産業に従事する企業の発展を促し、市全体で 54 の文化産業のクラスターが誕生するなど、この数年間で集中的な発展を遂げてきました。

デザイン都市としての取り組みとしては、毎年 12 月 7 日を深圳の創造都市の日と市の法律で定め、いろいろなイベントを開催して、若手デザイナーの支援を行っています。2010 年には、ニューテクノロジー、ニューメディア、クリエイティブシティ・シナジーというテーマで、ユネスコ 創造都市国際会議の開催が予定されています。

#### 「創造都市戦略「デザイン都市・神戸」の取り組みについて」



## 井上 隆文

### 神戸市企画調整局 参与(デザイン都市推進担当)

神戸市は山と海にまちが挟まれた人口は約 153 万人の都市です。明治の開港当時の面影を残している建物を現在、博物館、ブティック、オフィスとして活用するなど、旧外国人居留地のまちなみが地域団体などにより守られています。また、郊外には田園風景が広がり、緑豊かな自然環境にも恵まれています。今から約 15 年前の阪神淡路大震災を乗り越え、ここ十数年はまちの復旧、復興に取り組んできたが、その間、人口減少社会の到来と産業の空洞化という大きな変化を迎えました。人や産業がまちから出て行く、魅力のないまちはさらに衰退していくという危機意識が、デザイン都市の創造都市戦略の背景にあります。



創造都市戦略の中で、神戸は、デザインという戦略をとっています。神戸には海と山に囲まれた異国情緒の溢れる「まちなみ」、開港以来の多様な文化を受け培われた、ファッション的あるいはオシャレなどと言われる「くらしの文化」、造船から靴や洋菓子、真珠などいった「ものづくりの技術」という三つの個性があります。それらに共通するのがデザインではないかと考えました。デザインには様々な定義がなされているが、“魅力を表に現して相手に伝えていくこと”が一つの役割ではないかと考えています。「まちなみ」、「くらしの文化」、「ものづくり」という“神戸らしさ”、神戸の個性をデザインの視点で磨き、まちの活性化を図っていかうと考えたのです。そして、神戸に新たな魅力と活力を創り出し、くらしの豊かさを創造することで、住み続けたいくなるまち、訪れたいくなるまち、持続的に発展するまちを目指すのが、「デザイン都市・神戸」の取り組みです。

具体的には、まちのデザインについては、景観施策や歴史的な建築物の保存活用、神戸のウォーターフロントの活性化等について取り組んでいこうとしています。

くらしのデザインについては、まちの創造力を支える市民の感性を育む機会づくりとして、神戸ビエンナーレを2年に一度開催し、2回目となる2009年の開催期間中には15万人を超える来場者がありました。

ものづくりのデザインについては、優れたデザインと企業とが出会う場づくりを進め、デザインを取り入れた「こだわりのものづくり」を応援していきたいと考えています。昨年度から、神戸を代表する地場産業と有名デザイナーのコラボレーションにより、新たな商品を開発し、神戸のブランドをさらに創出していく取り組みとして、「デザインルネッサンス神戸 PROJECT」を始めました。

神戸は、2007年にデザイン都市の取り組みを始めて、また2008年10月にユネスコのデザイン都市の認定を受けました。まだ数年ということもあり、まさにこれからという段階です。課題としては、市の内外に十分、デザイン都市の取り組みが発信できていないので、今後はさらなる発信をするとともに、多くのネットワークをつくっていききたいと考えています。そのためにも、ユネスコの認定を受けた10月16日を「KOBE デザインの日」と定め、イベントや様々なプログラムを展開していきます。さらに、発信拠点が必要であり、旧神戸生糸検査所を「デザイン都市・神戸」の発信拠点として再活用していきたいと考えているところです。

## パネルディスカッション：「デザインのチカラで、都市をつなぐ・魅力を創る」



コーディネーター：佐々木 雅幸(大阪市立大学都市研究プラザ 所長、同大学院創造都市研究科教授)

デザインという言葉、デザイン都市という言葉一つとっても、実に多様な取り組みがあるということがお分かりになったと思います。

先日、ユネスコの事務総長をされていた松浦さんのお話を伺いました。「これまで一所懸命、世界の文化遺産や無形の遺産を条約により守ってきたが、文化財を守るだけがユネスコの仕事ではない。これからはもっと新しい文化も創造していかなければということで、この創造都市のネットワークを打ち出した。また、グローバル化のネガティブなインパクトとして、文化の画一化が起きているが、これではまずいので、2005年にユネスコは、文化表現の多様性条約をつくって、グローバル化の中でも、文化的多様性を守っていくことを試みている。創造都市のユネスコのネットワークは、文化多様性を世界的に広めていく試みの一つでもある」というお話でした。

金融と経済のグローバリゼーションが今日の恐慌のようなネガティブな結果を導いたが、その中にあって、生物多様性、文化多様性を広めていくという、ユネスコが掲げている理念は実に意味が深いと思います。

さて、今ユネスコの創造都市ネットワークはどういったことを目指すのか、ぜひ皆さん方からご意見をいただきたいと思います。まず、ラクロワさんの報告の中に『ぺちやくちゃナイト』というものがありました。これは東京からはじまり、あっという間に、創造都市のネットワークにも広まったもので、日本でもあちこちでやられています。一般的には、ぺちやくちゃナイトは、クリエイターやデザイナーの人たちが順番に発表していきますが、モンリオールでは14人の区長が順番に発表されるそうですね。これはとても面白いのですが、どのようなお考えがあったのでしょうか。



(マリー ジョゼ・ラクロワ：モンリオール)

我々は選出された政治家に、モンリオールのデザイナー達と会い、対話をして欲しいと考えていました。このような集まりを実際にするのは難しかったのですが、デザイナーが集まっているところに区長に来てもらえば議論が始まると考えました。実際に、区長たちとしては、彼らの区で、デザインや建築などの問題について話すためにかなり備えねばならず、景観やデザインに関する意識を高めるのに非常に有用でした。

(佐々木雅幸)

深圳は急速に発展を遂げてきましたが、一般市民はどのように感じているのですか。

(王小明：深圳)

当初は、中央政府からのある程度の支援策がありましたが、近年は中央政府ではなく深圳市政府主導に転換しました。市民はこうした転換期を迎えたことに対してとても歓迎しています。また最近特に、深圳市民のGDP、あるいは収入が国内ナンバーワンとなりました。

(佐々木雅幸)

民主主義が拡張していく中で、都市の創造性全体が高まっており、そのことが市民の所得も上げていっていることがよくわかりました。ベルリンとブエノスアイレスも同様だと思います。例えば、ブエノスアイレスの場合、1983年が一つの機転となり、民主主義が復活する中で、デザイン産業が発展してくるプロセスが非常に印象深い。民主主義を回復することと、創造産業が発展することの関係をどう考えますか。

(マルコス・アマデオ：ブエノスアイレス)

民主国家になり、若い人たちがもっとクリエイティブになりたい気持ちを抱いていました。そして、いろいろなクリエイティブなアイデアが出てきて、創造産業が生まれてきたといえます。その流れで90年代の終わり頃に、様々な職業でデザイン関係のテキスタイルやファッション、インダストリー、ゲーム、アニメーション、そして大学が誕生し、教育機関も育ってきました。またそれによって企業が育成されることにもなっています。



(イェルク・ズアマン：ベルリン)

自分たちが全てやらなくてはならないことがクリエイティビティーを生んでいます。そういった経験から20年経って、デザイン都市になっていきました。ベルリンの人たちは今や非常にファッションブルで、デザインに非常に興味も高くなっています。また、デザイナーにはマーケットが必要であり、デザイナーがデザインをしても、誰も買わなければ、やはり発展しません。こういった変化はベルリンの場合、デザインが構築されていく過程で非常に重要でした。

(佐々木雅幸)

海外のデザイン都市の経験、都市の創造性、アートマーケットの話をふまえて名古屋はどうでしょうか。

(池側隆之：名古屋)

名古屋では、確かにプロフェッショナルスキルとしてのデザインという観点が非常に熟成されてきた感があるが、創造都市に認定されることによって、むしろライフスキルとしてのデザインという観点が市民の中で興味をもたれていると思います。そういった市民の中から湧き出るクリエイティブな息吹が新しい産業をつくっていく意味合いが名古屋ではあるのではないのでしょうか。特にデザインウィークなど、若者主催のイベントが多いことが、何かそういう予兆や新しい息吹を感じさせています。

(佐々木雅幸)

神戸は、阪神大震災という非常に大きな災害からの復興にあたって、市民の人たちがこれまで体験したことがない連帯感や生きるための知恵を共有するプロセスがあって、それが、神戸のデザイン都市にベースにあると思います。そのことから、神戸が世界に対して、どのようなデザインを提案していけるのでしょうか。

(井上隆文：神戸)

皆さんの話から、マイナスからの立ち上がりの中で、創造都市戦略という視点でまちづくりを行っていかうとされていると感じました。神戸も地震というマイナスからの立ち上がりの中で、デザインというまちづくりの旗を振ろうとしています。皆さんの話からもデザインの考え方が少しずつ広がってきているのを感じます。最初は、製品のデザインという観点から始まり、それがアートや環境になり、社会問題を解決する手段としてデザインの考え方を活用していかうとしています。デザイン都市を進めているまちは、その領域にまで達しているようです。

神戸では、震災を受け、その立ち上がりの中で、「まち」、「くらし」、「ものづくり」という三つの分野でデザインを活かしていかうとしています。そして、従来からのデザインという観点で多くの方が取り組んできておられたと思いますが、あまりそれを意識されていませんでした。これからは、意識を高め、気づきの中でデザインを活かしたまちづくりを進めていきたいと考えています。



(佐々木雅幸)

今後このネットワークでどのようなことをしたらよいでしょうか、あるいはどのような形でネットワークを拡げていけばいいと考えていますか。

(マリー ジョゼ・ラクロワ：モントリオール)

ネットワークも重要ですが、都市そのものを強化すること、また、ネットワークと同時にネットワークの活動の中で何を共有する活動として選択していくかということも重要であると考えています。

(マルコス・アマデオ：ブエノスアイレス)

ネットワークづくりということでは、やはり選択的にやろうということも重要ですが、それと同時に、都市ではここは妥協してもいいなということもあっていいのでは。それによって産業をさらに成長させよう、育てようとする時もあると考えています。

(イェルク・ズアマン：ベルリン)

やはりデザイナーをはじめとした人材の交流がとても大事です。交流を促進することによって都市のプロモーションや発展を遂げることが出来ると考えています。